# 湖月抄

うすくも

24

Freer Gallery of Art
Washington, D. C.

7152

# 薄雲

細 巻名ハ哥と詞とを以て号之 河 入日さす峯にたな
びく薄雲は物思ふ袖に色やまがへる 花 詞に雲の
薄くたなびけるを見てよみ給ひし歌の詞をとりて
名とせりといふなるにや 孟 同 細 松風と同年也源氏
三十歳の冬より次年卅二の秋までの事あり

冬になりゆくまゝに川づらの
すまゐ 細 大井の里なり
河づらハ川のほとり也
孟 河内本桂の住居とあり
不用之 是ハ大井の里の事
也
うへの空なる 細 明石上の心
也明石の旧里をとし離れ
[illegible]
なりけり
つらき所 細 明石巻十一にあり
[illegible]女
[illegible]
[illegible]

冬になりゆくまゝに川づらのすまゐいとゞ
心ぼそさまさりてうはのそらなる心ち
のみしつゝあかしくらすを君もなをかくて
はえすぐさじかのちかき所に思ひたちね（源氏の家之 細 二条院の事）
とすゝめ給へどつらき所おほくこゝろ
みはてんもなごりなき心ちすべきをいかに
いひてかなどいふやうに思ひみだれたり
（源詞之）さらばこの若君をかくてのみはびんなき（明石の姫君之）
ことなり思ふこゝろあればかたじけなし（細 紫上之）
対にきゝおきてつねにゆかしがるを
しばし見ならはさせてはかまぎのことなど（紫上也）
も人しれぬさまならずしなさんとなん

[illegible]
姫君を二条院へ[illegible]紫上に[illegible]
一 勘大略三条又四条以上例勿論花山院ハ九条と云〻　愚案此勘[illegible]
此[illegible]明石姫君[illegible]女人の[illegible]
[illegible]
細 明石上の心[illegible]
細 紫上の[illegible]
源氏姫君の[illegible]
細 明石の[illegible]

思ふとまめやかにかたらひ給ふさおぼすらん
と思ひわたることなれどいとゞむねつぶれ
ぬあらためてやむごとなきかたに
もてなされ給ふとも人のもりきかんことはなかなかにや
つくろひがたく思されんとてはなちがた
く思ひたることわりにはあれどうしろ
やすからぬかたにやなどはなうたがひ給ひそか

[illegible]　細 [illegible]
うしろやすからぬ[illegible]
[illegible]源の[illegible]
前斎宮の[illegible]
細 紫上ハ[illegible]御子[illegible]
[illegible]今紫上ハ廿
四[illegible]斎宮ハ廿三[illegible]也
[illegible]の御子[illegible]
寺 斎宮ハ[illegible]十四[illegible]
[illegible]紫上
[illegible]
愚案 細[illegible]多本
[illegible]斎宮のとあり
[illegible]　細 明石上の
[illegible]源の[illegible]
[illegible]
[illegible]紫上[illegible]
[illegible]

しこにはとしへぬれどかゝる人もなきがさう
ざうしく覚ゆるまゝに前斎宮のおとな
びものし給ふをだにこそあながちにあつか
ひきこゆめればましてかくにくみがたげ
なめる程をおろかには見はなつまじき心ば
へになど女君の御ありさまの思ふやう
なることもかたり給ふげにいにしへはいかばか
りのことにさだまり給ふべきにかとつて
にもほのめかし聞えし心のなごりなくしづ
まり給ふめるはおぼろけの御すくせにも
あらず人の御ありさまもこゝらの御中
にすぐれ給へるにこそはと思ひやられて

さまでかよはされ出て人すめ
さきりしと思ひけるやおほん
師きみがよめんふとは源
のおほひ いはれたり給ふま
しみよ出家して東宮の御さ
へうちひるは紫の上すで
はめざましく思ふや思ひ給へん
とも也ていは源の我ちからき
まださひかちねしくて給ふ
御おほよく給ふ
これらかはそてもうくても
抄 此段紫の上のちゝを折
捨て姫君の御方にあらせし也
紫上の御心也
世の人ともさんへのほどかへ
もつねには 細 姫君に 抄 姫
君もつねには紫の御方へ
まゐるそば姫君とのたまふ
第よりうるはしく 孟 姫君
幼めのときより紫の上へうる
しやう人とのたまふ紫上の分別也
思ふべければ 細 姫君を
まゐりて は源の給ふと
とゞまりしは源の給ふ

紫上の身をのべてる也
さそすくしぬ人のかくしひさしき世へさへ給はむ
かもあらぬをさみすきよさらに思ふ事
めざましと思ひとらしやあらん人も身は
とそもうくてをみむとしていとひさしく
さ人のゆへをつかさはの心うちはやう
あべきまこそあめれざりけるすれば
紫の上也 孟 こなたには心をのぞ
うかなよからなあまたの御ことやゆかり紫
まことやふみてさえらしてしかめ
姫君をおぼしやりてつらうおぼえて
うれしくつましもすぐさひさるく
いつくしうなれくらん心ならつけ
かうならのゆるさらるもあんなりと
孟 宮中にて御ふの心を
ことにひとつかへりをみるて身のうへさ
細 是も孟おなじ人ゝ

おもしろう 抄 無為方也
まへりさめしとまうしくし
孟 尼公姫君をまとをし
てはいつくすれども 抄 行末
かくも源しやうれうと
思見え
細 朱雀
母うつ しりてそ
院は延喜第十一村上天皇八
第十四の皇子にておはし
ませし母方の下臈に依
て位をつぎ給ふと源も
更衣腹なれば依て位に
つきあらねのゆるさとく
源氏高は藤壺は延喜第十一村
上天皇は第十四皇子にてそ
おはしませとも式部卿宮
母中宮温子昭宣公女也
つかしまうりて即位あり
しるく西宮左大臣兼明親
王なとは第一皇子にて更
衣腹なりしかとも更衣腹之
しかうは臣と被給しん元
皇太の例といふにや
古大納言の今一ところ

かうさうるし あまぎりてさよしや
ても尼君御ことつゝしきぬかはいひしとは
なれはさりぬべくそれとつるにぎはれとおはす
よかろんしとそとえあはさる
源のこと
くねがしくのかふしうたかへあらしく
ちこのこゝてもこしもすり給てよ母か
今限今藤あるこ
さうしそこをとのほこともさいくよ思ひ
源氏の器量天子にもなるべき人なれどもとて
もあれこの御くの末の世に御ころするされあ
臣下となりたまふて
まとゐなりし世に つくへは古大納言の 内侍
ひとさきりたえかへりのそ更衣なるこ
いそれすまひしけらめにてそ思ふめ
一の宮
とまりて人はあまりさうへさりしみこ

大臣すぐのひをめして女帝后ともなりまし人のはらなくバ源ハ位につきまゐらすべき
よく人いろぐらふづき 源氏の御子まるとてもいかゞ人ハつよおもしろく
るぎさしむりひさをそへう
の前 細 此段いさゝか 
ぞらし。親王太臣子どものむ
もめとなるべきをちから
人も。其中にも親王にも
太臣にも腋芳まぐしきを
ま付てゆらりの形と云乳
師 此さしむりひさると云へ
國分と云ふりや。此ぎみ
いらうひ親王の立礼腋子そ
も大臣の腋子ても。國分か
養子ねとより腋と以
ぞまる人もせひそうとも
のぞらく。従おまさしむひ
うろと云とむりひらう
な養とさんくとあそばそ
然とよそ復てそハ此形文
立不快なろや
えひとしつぬすのなり
卒養腋とひとしきやう
まいゑあつねり。とく
おりてこれいやんとしるべき

わしだ。又みつらら大臣のおはしくらへやて。
すなはしもひかうひさをとゞりの所にハ人も忘 とゞり腋の人なくし
ひせし。おやのれまてるも。えひとしう
ね猶なりましてこれハやんごとなきこれハなく
くまりら人いつくめのし給ひて。ことよろしく
なれまへなん。猶くまつけて。ゆやふをひ
とりきつてりつれぬる人へして。やかそ
此とめられなかじめはなれバそら御 明石上のうちそせんいとうるさく
ぎのかども。ならずとてもとつても。 河 紫明
うれ源山のうれなくハおまのえりあれ
しまりをゆめしませてまして給ハ源ん 源氏え

細 可然此腋にも如来ようまりバあとられのべきしく 師 みこ大臣れ女そてもか養腋とそらり
腋ともいれちがふとまして今明石の上の腋など。いさんじなさらこくの腋子しよけるかま
うへじこまりへあとされのまんとく尭の上れ尭子にみての姫と尼君やまへく
仏のうしろも小も
孟 八くえひんりのらん尭そ
なかさんのうしろそまき
しうりろ 師 仏かしこき
人の心と以てうるまそ
細 とうせ子ともう
陰陽師宿曜師なとよ
姫君すとどふんふ乳
細 明石上の
せそん所とおもしひおて
御猶悲りしこしなせそ
の給く
師 うら偏きのす 孟 明石上
へ源の君のすすめ猶の行き
へ姫君をよくいまへとの下
ちまさ源の乃すひくらむ
細 宣男の
くまはちきまうま
ひろ成まこくしもいろく
とく。みさりきそ。身を殺ら
てもめすとくかちうまむ
るハせひまりゆうとて

と海年をとらでまへしもみさし乳人の
仏のうしろをみも。猶とくをみどもすり 白
めも行てもうち給ていまうち 夫 姫君の為にして二の乳人
いくバ此りひしくらりめそら叙も占めら此殿 細 明石上を 源乙ハ姫君をまうして
しおかしゆきらんとこしろのいと此さには 絶べらんとせすそ
ちをそもえの給て。ぞ猶ちりて淑ぎのはしい 師 文せ以て明石の上のあやく
かりまよらしの給へ所。形なりはまゝん 明石の此かうり 其の猶く
のくしくひるさきまさづへ此あまそてくぐふ 姫君と身まいそく
此ひさきもいとかうらへく光ての猶る乞 若君此所のよく
さらおづなるそ。いてまへまうへへやとぞめて

源の正頼く
日あてしく世済かて
孟 姫君の二条院へ下らり
あい日く 師 日どりまち
とらま日し
いとくらきなれこと
さへとり下ん
兼家の二条院へうつろひ
給までのとまさし別
へ々れハつとしうてうな
さのそかく
下りへきこやめわしぬ
細 明石とらいりしも縁
ゆくこそわりつんとく
孟 何縁と請て明石の前
へ京かりくてうて明石
入のおうてきさと京
よわらハ志がうて無り
しんとし
うらうしきこゆうるハ
今うくわれ給うともつ
めるよハ明石も源の京へ
むくまふへ々れハ今生す

ころをいとく衣よめがりて。日あまりく名しせ給
て志のびやうよさうづらしらうしのあひ
さそしさを給かまうらあくさせんしくへるざ
いと衣よめがゆれど君の方はまよ、らう
づきこし給しそくし給へ心どめのとぞとひ
きまうれるんしとしわあられの地中をとりしさ。
つきくとも折るうしひてゐぐさあすうひ
つかまいとくあけぐうあすとしてさへとらそ
へいざらう荒ゆくづきこしも君けるくめのせ
をふろへきおやめかしねさ海へそしてさそりそ
めぞとし比のけんぢら人の、まきられがくらしへ
しうめがしのべきしらしさえらてめ

まことしらうしちかゐる
孟 明石の上此上着しき
八うして京生ハらしを
明石ちうよ姫くとくどのも
心君をあみえうくしれ
らびとのふうし座を
ゐがあのかくし

しはうも給くしつねかけとあめのこる
がくしけしてもしそくよ志ひへのかう
姫君らひしねらんが。やもそらしけとも給
べきられあじらうすきけくもとばかとく
よまそはかもうりぬ。書あくれがうつよ
ふはそきせうりておやしくさ海く
よ。地中よへうりゐるあらうれとうらうげ
さそうるよらもこの君どるぞしてつくろ
ひつくゐうう。書うき書しうりつゝとろ
あしさそしうゆくさらのことのそうび
とひつけうくまいてくとよきらしうきた
いでゐるどもをぬとみぐはのこ

やうきゝん目

なごりをしさぞ
まちるのあゆうこゝろしなりめしうやうござい
くらゝきこうしろぞなさじくらうちるさゝん
とこうへし也とくもつらうてそし母もくれらの三
うち母あつりおあまござとくいたらつゆそうやう
すうん日ましてつうよ出月けるうんとら
うらげすうらるすぎさそ
宮わうさえ山のたハられはえなをめぐかよ
へ給うしぞしてとの後へいめのとうちるきこ
く
ゆうまなさしの山を忍でもん乃
うしよ給うしめやはたらひすいさらし宮と

ばかりなり　細　髪さし飾りげりきよさこのくるりや　盃　ひらきてハ生をさく
あまそぎの花　細　ふりそぶくさげ花の髪のかざし
よそのめ　ものいふらん花　女君のうへの此姫君とほどあまして来へり　ますらくのま
ゆくさかげくらんと待のとしうりまいて人若く心もとく
うらうへしの絵あり次
姫君のゆくらうりのうすいとい
くしく入室して　盃　待の種
くに逢ひあふて　師　紫女
ゆるもく或説に鮑をとる
徒わりて正月せしまり
何かかく　細　ゆかんとの袖とぞ
木下陰るよりふくずまま
しまさづらく　師　姫君を
紫の上のうへまうしまい
らせそもゆゑの服にと侍
姓の只行きと人のものがた
ときなやうに人侍の女て
るしあるひまづ行る事
こゆきんられしうりんとハ
玄為うしふ思ひかゝくず
玄くし
ざしらりうきそし　細　ゆゑ

結のふんわりやことをしハかり給よりとこそかく
しろんばらくへしの絵あり候ふなまりかい
口わしき男の袖どもすへんぞるよ。まそしてすつ給
くしここそゆる袖りしわんでわへたとうしるな
くけらひ義ならひめ君ハすまゝへあすく
来へ待の姫君とのぶなひまふ車く
ては車よのりんとをいそきぬ二給。よとふる
ゆゑ
あまよしくぞみえづらしいづきさいでまつり。
姫君の子なし
うきしの思ひくいとふらしそて袖とどと
まてと姫君代のまゝく
らんてのうきへと、ひらきとりきつ給が
えくく

よそれよそのひ給つなくふり思ひぞくへ松風巻にうハりわり。もにりくもえしのめの
海よいうちわりてものへし　師　松風の君
仕ゆるまてわやしうぬ
よおてハおしえ給りなく
身づうしうもこそて　かのまふ
あまとときさ　細　行末と説しくゝ
じつれぬ人の世をとうぶき
ぞとく
細　松風巻に
すひそめし
わざと花根なしおやいうて
とれ上のなしまそけて源
きんかよの給ひ。花ある説
給花。武蔵ハ松ハ二本ある
れがゆくことくさへの二人
よ前さうらし。らさは書
よ。あさと花根ぶしゅへや。ハ
ういと花君のいとけしとな
くさわて根をもたあれ
ばと後まうり　師　説猫乃
姫めぬ　おの少も　松すり小松に
女君上と姫君とく説に用
くおさへ。師也入そめし根
をかつあれハとハ姫君と
女君との契をかつなれバつねに

紫女
まととすきこかさしの松よもかきつきれいはつ
盃日　師　ふるき家の松ハ姫君にあそびて今別くる人
あふくさうけとゞろへぶ。なえもいひやりしい
細　源氏のおられハらしと玄ん説
とじうすけはなりやあれふ入しとはりふく
源氏　或説
此ひそめしねもかくれへなけ海の松
奥列の名君へ
女君よおひうすそ
よこかいのちりしぬなしへんのどうよみをとと
紫女さく
すでにある給ふからしとしハゝいひうけむねとえ
此二人姫君の車よのりき
るへくさうもとる。めのくゝかねよそよりそやう
細　とりの女房ともの車く
から人ハけられ。くうし。あまからや。しのゆより
ら下
てのうへんぶまりひよみろしきわり人ぞくる

そ又あひそへて數をとゆくべぐしとく。師説上ハつくこゝろうき旅とをおぼへきこしと云しを
まづさめて後はつくおもふらん松風の音のあさきに報さしゆへやいうくしと云細とるけこ
思ふゐまハ及ばんかしぎん氣うへしゝぬまさかなおもふべし
御くらしわきま人 氣賀女の御たいしとかゝせてらあり。車ハ陽明門にけるりのるく 河内鈔之下浪
男女調度也。尼君あ母うハおもうこのやうケうお之。仙源抄 依り中宮車ども是よおおもしろく之二藏
すゞ用うべし
うちわらふ人 細 師説上のす
ど源のとひやり給へ
いろかつくやくうら人と
細 是ハ思源めぐるきせと 師明
師説上の思べきこし 師説
説上よ物をあくさぐ 後世
のつこさやこえしのらく
ゑみびさうふらだりふハ
細 こうくき本のまゝ
ひかりけどいへくのゆりひ
しし
めしゆりて 細 二条院の西
西かうべし 住し也や
よあらくつれなし

みどのをそれなるをしのびて 源にても すん
らうまらうつ人のうらうろしきおハいのうよ
つゑやうらむともわきも。らしうおかしつゝ 二条院へ
き御車よはするうらたれやるよけるひゞと
なるを。ねすくべきうらとをはんしきるく
てやまでらんとおひつれども。みしゆりてと
しるまうつうをまのく。ちうささ御でゝう 盡 二条院のまろくく 姫君の御迎のさ
とくとく何うしげまくのへさせまつり。
めめとれつかれまへれ。がしのまくことのくいは

山里のつきく 細 師説上のす
とおひやう給へ 常なき
へさひきさ山里まれハ姫君
ゆらぬ後ゆうしてとかり
あかあらく 細 符合之う
しゝ 所こゑかふハまさうま
いしせしりの。お極しゝら
やうに我しめにとのくそ
いよくやさへの中のゆりへへき
細 源の心 関くハ常よ法
脈ねくあかべならふもあ
るましれ物ぞとし 師説
石上の脈つくし源の心ぞ
なへし師とやらんへのお
りたゞこゝろえすあり。紫

よおうれうとあさせまくらり。かう思ハうら 姫君へ
まそねまよくらりけるこほらされくあするるこあ 車まうく
どへし給ひすしあるさくふくれいろんよりあ 紫上の方へ
ど志てまへど。やうやくぞめぐししてぐくさ
まのうねとりしめくらうしけ。日ぞひ
そこまへばめのとめしいそしあずぐあきめまうき
らうしうてし給。山里のつ思ひぐるりしていう
と思しやうハいとかしされど。御夢地けをこさ
海よりしづきつそううふハいりのあひようこ
らしまあしんじてぞゆく人のなふべき心やぞを
あきこと心のまうりよいぞしゆんをぞしと。
くらかしくぶげさる。ちぞうしいい人でりしめく

との腹[illegible]バさん[illegible]の[illegible]
ど[illegible]らん物とさ[illegible]う
の[illegible]よ[illegible]で
めでし多きものなく

[illegible]ゝなりづりの
ごしゆがし[illegible]でうハ
細 別に[illegible]もみしぶるけり
不断の[illegible] 願上人[illegible]ひ文
[illegible]ひみどのきこく
しきよいつめてすられバを
きいのよりくすそくみ[illegible]
ともしたとこと
[illegible]ひ 姫君の[illegible]さうく
[illegible]しきせハ[illegible]の[illegible]
[illegible]よ[illegible]くちかし
[illegible]かし
[illegible]そも
細 [illegible]の姫君[illegible]

かたちなど[illegible]しらねど。[illegible]こゝろやすく[illegible]
し[illegible]すれバ、[illegible]よひとゝく[illegible]
ひとゝしまゐれバ、いつ[illegible]ゝ[illegible]めの[illegible]
[illegible]しとうらくしともすゞ[illegible]ゐ[illegible]
ひりてあそび[illegible]し[illegible]ひてめれとも[illegible]のゝ
[illegible]つきらうれよ[illegible]
[illegible]のちか[illegible]て[illegible]
[illegible]いふよ[illegible]し[illegible]しい
そ[illegible]しても[illegible]ど。[illegible]とかう。
[illegible]ひ。[illegible]おそびのこ[illegible]し
[illegible]し[illegible]まへるまら[illegible]
[illegible]れの[illegible]

の出入[illegible]ことを見ゆく
[illegible]
[illegible]細[illegible]
[illegible]日本紀
[illegible]

ちよめしと[illegible]ひめ[illegible]の[illegible]
[illegible]ゆひまゐるもつゞ[illegible]
さそひてましまゐる。[illegible]つきこせん[illegible]
しきゝも[illegible]のと[illegible]げにこそ[illegible]
まりさしてり[illegible]を[illegible]
うすれど[illegible]めて[illegible]つれ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

とハ姫君へかよひあはれみかどハとく早下して遊ばさせ給ふ女房どもの
心をさはがせるうちのかねども御心のみすぐれたるひとのめでたし
御かたちすぐれたまへらん 細 源の心ハ姫君のおほくすぐれたまへる也 孟 姫君をとくとて
まことハ猶いかでかと思ふ心ならん

思ひそらくし 孟く姫君わ
うらみありてハ公卿とも明
らかのすをとゞめつゝ
こゝろしぶみとく

非ずうきこ給のハちか
細らしと思ふらくしさ
人のうらみどもよまう給
人あらんし 晴 卒給乃
孔のあり也

とじさびしきをもまねよあげられのりつゞき
ぐさきさへあられぬありてぶらんとしてのみ
ぐかしかれハ御文などもとゞめすぐくにて候
それ女君も御覧じてトしみ思ひつゞけてこそ給
らずらいらさんよつてゆるしまゐらせしまゐり。
としをかりぬらくるすら空よ思ひて
すきゝ御手習ハいとめづらしくこそ思ふ
ふあそられしそひよ。まいりつゝひ給ふ。
人の中にすぐれて御心のハや日頃しらばへ
どしすみのうきつれまつり。そらやりける

うくべハわくらくよ 細 天下を
卒の時ある也。勇くにくりて
ハ勝ることの世ハあらしわ
どよハ思ひとたまき給よ
又あらうるとの也。南附
の歴代をとり 孟 是当
代穀生のことくりく
さきあらしハ 細 同意上は
給をし是ハくださ給よ細
こかも流りしまへく

まうらうと角らりみと
今ハわさと花としてと叡
るみどしてめ文の方よ
くりてあしまうぬく

ハあまりよとるうくるしけよそもしけり。
つぎつぎの人もかのかたちはかりかくこと
いやしきんじらんハわかりてよそ
かひなりてかんじの御乃君のかたち
をもゝ御てこのすらあおしがひ
さ御よそふつ女人ぐるうくのごとき
みじうしけどもひつくしつる給
よらうさ思ひハこよすくてのどかなる
はいかまのひまなくみはかなくも思ひさ
まさなくしあやしきこともそらはれて
やうよけぎなし御つゞきことに
ろぶ御のおもしろよこのあいなくうつり乃

ごう　たゞ省男方の別当
せし程はかまは家司など
ありき

ちくとまゐりけるまゝにてあかしめしとおもひ
すつありがたきまでうしろやすくの
どかなかしまへ（かゞゆかりのれにころとき
てみだしも、なきこのはかりさ海よおもう
りうめつてよろうし涙もそすゝまゝてあ
おつりきこ見へうへあるねんゆるしご
とふにくさにまゐりつゝまうでゝべくうと
りこともこえすすありくまゝれなりがな
きかつたくめやすさはなる御なり山里
のつまくくやとしこへべきかしゆれなり物か
やけりまこゆしりのきえりしる御をとぐて
もゝり御もてつゆりこよるよらし

さくらゝのはあり
細君の君の直衣なり
えるの帯の垂衣乃うしろき
藤芳なりとさうしろ名を
はいまうゝ下の保人の方揃わ
ふゞなりうべし
女君ふうあさくれ
孟保の装束きらりは
こもしゝられ八紫の白き
うらく

しかも　孟　外の人藤の身
世一よへ戸なり細姫君の
あてひ御よ御くく
めと給りなく　細　保人
の句く稚なる　河　左久良

比止安曽乃不祢止い女之
末津多乎止己知津久礼
留見天可戸利已辛也曽
与世安春可下利已辛也
曽与世二此已止佐已曽安

こうじ御さいさくのはるかなりしよをみおく
ねはぞひたさこうねてさうしめうこうぞ
きまそてまかりいとあふさ海も海なすさ
夕日よいとどあてかうよみてまいに女
ぎよどなうしびこもをりとなりそうえ
まふ。姫君もいうけすくれさうしねさこの
すそよりうちていあてひうちて御おど
よおふとひぞまひめぐれいうらとふ海
あそしいとあられとゆかしうらくへ上
てわずかうらんとゆらずさうひていゞ御
はまうこどのくらゝよ御うけて中ねのこゑ
してえうくまふ

春止毛伊波女乎千可太作津万左利世那波安春毛左禰已之也曽於与左安春毛左禰已之也曽子
や　催馬楽桜人呂也　催　桜人ハ花人とふかきとしふるき人と云へし　儒田と下町つまり
世

舟とめてそちらさへ人のすくいこそあすら
へつらんせうとしまちうめいさうすれてこ
あれハいと見ひやうまゆくあらそ
ゆきそしそあすもさゆらん申しくまを
らうこんハんとくとをかまこし九此うちら
てぶれわりさまふひとはうハらいらし
とこのハいとちうらこへのめぐさまうこさも
こまちくゆかしゆうされあこうりいつま里
ひとすうんと我そそいまじうむてうら
ゆつききと海とどうらまりつつかとこ
らまりれくうけうちはらとくめ

なくハこそあすとしまこ
めてくく
ならそしや欽のよしく
　細　桜人よ宝叙
あとしめ
とじめくき詞え上の詞を
うけて陀り添武と明石上
のとうめんくし桜人の事
まて忠房かうわり明石上
とを源氏へよなってとう
師とめまうくをうと人乃
なくハこそあすとしまこ
　細　さゆらんと
八早く来んとし明石も
明石上ハ中くゞくともを
あすゆ行らんと也　花鳥
こあをハおくのそえとも
つかまとひどうこさまし人
　細　紫上のおもひやりから
　　孟　明石上のくさ紫のうと
りりとおもしるへ、

あゝうかめのじくい
紫上の事よりうそまし
さきはしく　孟　紫の上の
ほうこうあつひと女房の
のゆあゝるし師などうめ
まあつうさん聞しくい
作源勝あらどのらく
さうそろれく
桔雑なり、そのあうまさ
ひきけりみれまさうし

おそうりの事ねのれわいえま
のきまそうれまうらぶんと
ろくひまのくやゆとおり出
き
あさことうなきのつき
師説明石のうさ
なりくへあそしば世より
みかかりのまちくひを
むうべきりのかとまし

緒ひつくしられぬまつる御前へいたし給ひ
うかゞ前すうんてかどゝ給あのかしくけいたし
でかみうしろひあつくりりしかは此を
のかうよみをとおりけらひまむこそ
しも家の事領をゆうそうれてめぐう
しきまうつしのうひなどハいうへ
こまやむどゝるきんくとまさらうけ
おもうよなうしばうゝらういあゝます
知つねびやうりとしうめのつゆのれ
何えまうちきえうされいつういひな
くやそしとおふへく我世めくねひがしろ
すう地やのゆのくなどそうしうれ人

ぎりこもりをおもはするべきよしなり。さて多くはさびしきいろそのさうち爾きて
やみてしたがふ人へみちとどけんにかくりぬれしき人なれば深切なりおもひめ
ましとのよう候なり
世なり細ねひがそのなりねや乃さらしても[illegible]しまされ人の分どなりしはさ
くいとあべきものとみどみゆれども
師説人の身ごとは。おもしのう人乃俗説をいふなりおやの入道乃世なり細ねひが
ものなり。道来の中将などをそへ受領なりなりくわりしろうくるなりそで
ならり乃孔その手古くことそしくみがしあれども人がいかやうなり深氏
の大切なりおほしめしおけりなくともおなじくらゐかしりけるは
ものぞかなり。今て然あれりとて大臣の孫なれどかなふべし。師説うくの
てらし。暁細の説はもれなりてしなり
暁のうへのこれつねみをしおくらばこれわざふりかしくもおもふせのだにあら
しの入道乃みをとそんそうかくなりて北にみもちあおりしのうへの人は此みぐ
なしとしいふことをおもふまりしさうするうをそへ　細　ありしのうへの人乃ゆゑかさ
のへふかくあらばは氏姫君とわかれ方ありもんこちくしろくおもひしのさへそ
ことそしとさうこしあてりともうかめしあきらかにていおれおもはさるのみそしなり
此氏比股花散の註釈と書のきこしみへりともいはず曲きこ説しかられば細なり
枕草紙よ細べし　愚案　暁細の説をのくらかくくれり。今師説にりまう筋
く論をこのむとそろうよさてこがふべし
の旨なといさてとあべき物をみなと覚えても
その川かまあかぬかりどもよのうあれば[illegible]やくの

末人うろの[illegible]よいり
ようれゆへりしさうく人
あとしあふとしうあしく
あけうれしあみとうり
明同
ゆめ乃ようりれ
細ゆめてしうりゆめれやう
されいつとかけひ給さ明玉
とあ給ひくり斉よ不落氏
末葵の頼よ行くるらち
し給なうべし[illegible]世の中は
葵のようりれうきぬうらん
ようってねとそよ人
ひくさそぐしれん　孟　青表紙
よ八引をぐしとうそりて
雨て、うでくもとひあん
うく世に趣色しててへう給
ぞしそう。花香にひさぐ
しうんとひふざ季として
奥の字と関こ此时八袖の
ものかりうろうみへ河海
ひさうんじれんとゆかさう
蕙こ蕙雅の心く花ひさ
がりんへ一おう人しうん

うちすしれちうさうりおふもうろーしてく
葵のまうりのうきうらしとのそうらし/な
けうれてうての瑩されあうとのきまそそうの（涙の弥まさて）
ありこもそしさ乗かけきうらしねも。例の御がり
しいぞうられべひくくとまうりをあまあへ（吹此の上へ）
だまどうしうきあうせうろ。いつぞくうつのっ　ひ（涙くへ）（向ひさえし花ひさうし）
さともぐしれんとなぞうろ。わか悲のれへしとゐと。
こ雨やうようかまひうくかうれ。らてハゝく（吹此上の前へ）
あぞそしわあれどやかふようちとまうり路
ふかりくあれはぞうれきくでりのこはい
ぬどうりへさうしあすくとさもあふぢうき
流まうへうどの御とまゆゑしまうまぐう

りつゝけしまくはなむされ給ふも心とく又いとゝ
けぢやうましうすくいとしうすべての事
まいりてもあしかまぬなどにてもハいと覚えし
ことにハ色めかれ女ともうちはれんの程ともに
ちうやうしてもうぞうらりと坦わたしくぞうらり乃
こといふつくもぞ又いでうくひけをずるかし
てはんともなそてよりてしふぞふうとしてすく。いとゝ
めやもくぞおりけり。坦ぞうけよやんごし
あるは所しそしもとにがりけりとしらしうしけ

ふくしうすくぱけくさうされたりてあすしどうふと
さられいぢうさ坦とよおずじらひとくハ中
くいとめるれさく。人あれつくれるうこと
おぞそおしおしふ敵さうふくやうすよふ
つまくへすへるこそ。さけさくられとふへ
しおくしゐとさうそそいひしうどの所んと
きそおりさ敵をゆりしらうぞ坦つみり
らずすく八りうしつむつぶつくことを
おもふ。おもてしくらる。しとふともとも
ゆおくるんおりそうぞのこゝろ坦清さむし
どうしでのね。世のとりしかりしつ人今すれ
ぞ。坦清やけゆと坦ずしあげくふ。とそへふも

の表事治し時のこと
師さうさの重よあらし
あるし

みかどは御とし り
冷泉院は今十五歳なり
おとなしきなり

よびつかなる時分 紅葉の闇
あさ顔ひも叶ふまじきを
いはゞ物語源の心へし 帥源
内々遁世の心ありしに
太政大臣ゆづりてしは本意
のかなはぬそれは源を

里へくだりし頃とどうよ。おもおもしと思ふ人
さはがしかりしはかりてかなしと思ふ人
おほかり。源氏の御心にもいとくちおしう。
よろづのことをしゆづりきこえてこそ。
いとまもありつるを心ぼそくことしげく
おぼされなげき給ふ。帝はおとなしくねび
させ給ひて世のまつりごともうしろめたく
おぼしめすべきにはあらねどもとりたて
御うしろみし給ふべき人もなきを
たれにゆづりてかは本意のかなはむと
思しめすにいとあかずくちをし。

しくやうきく
のちれさらずみともし
孟浪仕の延喜とほのよく
しまりく
世中さはがしくや 疫病
のはやるなどべし。華光おこり
さわぐとの動かしく
おほやけざまにもそれとぞ
うりつてもうや
あきらかにみえてはならぬ
天文暦数風雲気色註 謂
天文者日月五星之行次舎也。暦数者計日月之度数而
造暦授時也。気色者風
雲之気色。言以五雲之
色視其吉凶。以十二風
気和其妖祥。應和二
年十二月。黒雲気下
条広三尺計。起坤至
東。保二年正月。白
雲広三尺許。経天

口おしく後のはかなきわざにもみこたちまごにすぎて
ひまごまでしたしくねんごろにとぶらひ
ひあつかひ給ひし。そのとし世の中さはがしく
世中さはがしくておほやけざまにもの
さとししげくのどかならでおほ空
にも例にたがへる月日星の光見
え雲のたゞずまひありとのみ世の人おど
ろくこと多くてみちみちのかんもん
どもたてまつれるにもあやしく世になべて
ならぬことどもまじりたり。内大臣の
みなむ御心のうちにわづらはしう
しりおぼしゝることありける。入道后の

[illegible]の勘文とは陰陽及天文博士などより天變の[illegible]を勘へて帝へ奏する也 [illegible]世に[illegible]ね 帝の[illegible]の[illegible]下として[illegible]御心[illegible]の[illegible] 勘文[illegible]や[illegible]の[illegible] 内の大臣[illegible]南代の御父たれば[illegible] 孟 源氏の[illegible]天變を[illegible] 御心[illegible]也[illegible] 所なれば[illegible]也

上臈しき[illegible]功德感あり 細 [illegible] 上臈しく感あり 細 [illegible]

三十七にぞ 孟 薄雲御年也 細 此年の重厄也 抄 [illegible]女のつゝしむべき年也

さいの宮の始よりなやみわたらせ給て三月にはいとおもくならせ給ぬれば行幸などあり。院にわかれ奉らせ給しほどは、いといはけなくて、物ふかくも思されざりしを、いみじう思しなげきたる御けしきなれば、宮もいとかなしくおぼしめさる。ことしはかならずのがるまじき年と思う給へつれど、おどろ〳〵しき心ちにも侍らざりつれば、命のかぎりしりがほに侍らんも、人やうたてこと〳〵しう思はんとはゞかりて、くどくのことなども、わざとれいよりとりわきてしも侍らずなりにける。まいりても心のどかにむかしの御物語もなど思う給へながら、うつしざまなるおりすくなく侍りて、口おしくいぶせくてすぎ侍りぬること、といとよわげに聞え給。三十七にぞおはしましける。されどいとわかくさかりにおはしますさまを、おしくかなしと見奉らせ給。つゝしませ給べき御年なるに、はれ〴〵しからで月比すぐさせ給ことをだになげきわたり

みづからしゐてとりかへしとも
なくて落葉の宮の御ありさま
ならずかしこまりきこえんとおもふ
をそうしくしうおもへ
るしのまかりしがたきを
上の御心ち

源氏の母とし　落葉の御かた
を源氏の御かたへしくらん
よりおもひかけしと此よ
あつかひ

ならさきゝせ
細　后の御心の中ならん
内裏の人とも　御にうる
いかん帝の后にて今上
國母女院まれば宣の書紀
の御人なり。又この御
ちかひのあつくて心の隆
なくおもはせ給へりは
なりてわらはそく

御心つよくおぼしなすをも、つゆよりこそ
こゝろよせきこえ給はざりけることとくやしう
おぼしめしいらるゝ。こゝのかしこぞおぼつかさ
てしるべの（引かへし）ことをきこえさせ給ふ。八月ばかりつねの
御かたやうこのもとにぞものがたりきこえつゝも
源氏の君ぞもあやしうおぼし入りたるかたも
（細殿すぐし還幸あかなく）よそにおぼえ給ふにしるしたまひつゝそれ
しるしくおぼえ給ひ、ためしとくらうしうそはかろ
まろしき物と思しまさる給ひつゝ御心のう
ちまおぼしつゞけてやよこゝにすゑと世の
さまへともてなしふ人もなくこゝろのうちに
あはれとおぼしゝも、人にはまさりけり

人のうへの御ことにも
細　源氏の御ことなど更にかくも
御後のあはれと知らしく
御後に御身泉へ源の番
通ありておもしろかりけり
ときこえしかおぼしそめ
らくほせまでの御おもひ
ともおぼしく落葉の宮
ひのおかく
御心ばへかけてさ御
うてもうしやんごとなき
細　太政大臣のとうのごとく
孟浪の今まで位の北とて
のちのおもひしさ人ある
女院のうちへ人かたるを
歌にあへ所出かへるまで
お后とい女宮中の御あはれ
ともがらのうち人にて落葉
たびのうせおほんは歌を
あるべきことおもして落葉
の御あはれ人あれぬれ歌
き深くならの御く

おもはしからん人の品だにのかれもしるべきこと
のみさとらるゝを落葉をうすはなんむべき
しつしまかりうせのおそらくれのとをそう思ふ
めでたきをわかれさらにおぼかしとも
なへきらし給ひ。おぼくて若宮やけ
ごときさ御まはもつくやんしきらへ人のう
ちかけつてきえうせ給ふへとまに人もれ
（左衛門と修理のおもとのこと）とくおしるけしく人だれぬ衣いと限なく
（孟家通のこと）て御おもひなど御覧じいらせぬかれし。
衆はおぼしえさりつゝすらへ人今一
度御とをおぼしめぬかしてうらくおぼしまう
（落葉の宮のかたさまにて）れば、かゝる御まの御ためにてあるさ

くらしみと　細柑子八毒あり
さ有りて病人ハ食用を
あしくらし但それまでを
あしく只不食といふなるべし
晴　只あやうき柚を
たしなむべし　細武天
皇神亀二年柑子従唐
國来植種子云又本草云
柑子無毒云云仍病者
宜食歟
院の御ゆいえん　細右の源下
給ふ事也相壺の御さまへ
花見ハ故院の遺言によ
りて源氏君の厩をまもり
おほすと女院の御心より
日ごろうれしく思ひ
しをすとおほくる事
孟日師　源の厩をみ
ひろふて冷泉院

源氏もまうべきんでよろこひまうしたまへ。
あくし花のかぎりあつかひて御ゆるさき
しも月にあやまをまつふれにうつよれど（今の御）
こまかいとはのみちもし御ゆるを給はるまじきを
世話つかりのいとゞいてうる御とれさせの（此処のうへよれ行ひの皆つかりてをとく）
御るよこそしかりてはうらじなし（柑子）
どざよあれきを給ふをじたうりまゐれけの
ふあるすくすりせ給ふるうしくあけくん
くばかりさ院の御遺言よつれしひてしらの（故つ不仰とをもえ）
かしらをつくまゐりあへいとよしげ故すひ（今の御信を思ふる）
きか給へと世間かれどもふかくうけてか給ぞ
ひかりとうとしるかうき御まとし

みかたよりの思召おもくなかされしくはかりなきもの御
ありつけてうとし　女院の御の前の御しきりくちをもてなしまつりあそうし
りらしまてんとのをおもひしまつりまゐりとなりてゐると今日儒とし
なとうしもいそうか
やらしよ源ハ薮壷のるすを
御へ今とふもみとらめん
し源右つかの御るよ
の御わか御より人のえ
とんめんすとめかりて
御厳源とをてしみ
御ふかく
あかんよりれ　藤壺の
ひつしよりの御ありを
今ふかしめとふかく
ここの世よつあそても
ゐる界みてもあるうら
しく此さき藤壺賊痛
くまそて御心のそうにお
かざをうかれハいかく想
しうえし

えんとのこのどろまさひ給ふると今あえ
象よくちかしくて御のつまのさきまゐらす
みも御のぐるをあるよ御れいちへと雪や（細源の毒之）
思給ひすあるさ給さ御いとろうとしおぼ
うらしもいらくてさ御みてし人めとれ
わりへとくつかしへようの御あらさ御
きたうさの世よつけくもあそうし々さ
おしき人の猶をあよろすふわざうね
じうけくめとうえ人うさあすくいうひ
あく妙御さうてと限あしとくらし

たとへば師今まだたんによりての寺のなりや
ころくしくぬ身あり 細源の内く師 仏法の法の道をよろしみて内の也
みなとらぬ身のうへとのかなしみ
みかさ地とくの
おこれもそのゆゑを源乃
きりひまよれ口わしみまで
のかりあきらかに給へき
こえなみかなには
孟源の細く條くのなりなべ
さとてさわさくと去て
としうち宮也成なが絶き
源仰くな西白らく入乃大将
のこと
然みつからしのやうなそ
河如燃盡然滅 法華経
お落雲の條院のうぬ也
源氏の君給ふりて此條流

かくぬ身なりしもむつしらせしうて
つらちなべうしどんのいくらへぐるらに
まつかすしれやひまうつは地かたこ地とくぐ
のかれふれひめらなどさはち世の中ーこうわわ
くらくしくもゆのへらうしはまたうく地らし
まをげしらけようたられ給んって世す
給んふもものならなるらちすへし給
ときそし給ひてはやもし火などのこさ
えいうやうふくるそ給めれはいかうひ
すくろのしうてしとかかりしなけくかたこ

うけかくもりしせそて
河豪家 史記注 掲冠子曰 徳高家 有ニ人徳一謂豪又
万人者 謂之俊 徳十人者 謂之豪 徳百人者 謂之英
英也 細々のみ権威を
強むくつゞらむ枝勝せお
うしけいは権門ぞそもるか
もとくれいそう
くとくの方ともくも
細無用の物とぞつやし
給けるかゞせ 孟功徳の方
とてしも人は色役 久役 なるとど
とがけてもろやうあるる
八獅子 もてしもするて真
実の仏心ぎしとをうせ給
わしお人のもてしわらはきに
さがひて絶入のどして
すてく名せんなかしく
かうぬし
つうさくるみりふの地れ
とみつさうりうしそ
お太上天皇よりゆずら
封と申すひつれは年官年

落雲の條院といふり 楽天讃の詞
とこの身の給ど叫ゆら中わまれらぐくる
どの世のあるとせよとほしくなられり
おりしもしてげばけはことにそれ人の
かろへとあるしかしもなのつくう
らめどあをいふくをるうわりつらの
そられすは人のつうきつくてともも世
お給人の上を憐愍のかわさぬ
のらうしひしるべつとしといくめる
はむくの方ともとももしうよの給
てしめしうかさしうまらふへか
どむしのさましき世みもらうし利かど
これいさやうあるしるすくてしもしら
のさうしもれぞまふべきつさうろみ
年官年爵
お先帝より

爵高の限わりあるまじく又中
宮もその付もおかしく御女
御のおそくなりの人ぞうりよ
てゆうすもせさせたまひてか
のつひへあるよしくもいきほ
代のかぎりきよろなり
叙五人ハすくひとつ川たのまり
細服紅のもの禄園也 孟 天下
德園せ美服ずし
りのもくへなりと
細天暦 すなはち石代書に
さてしるへし 村上
記云天暦八年正月四日
冊着服四日今朝撤御
常御座改懸并簾以二
錦綠細布為端
古今 風葉
こしかりハ
此等への様しらおもはべらし
いかりハさるみなめなさけ
人の見とがめ
おこまりかくれてかくれし
めもてすいかもし人の見め
さをかくれもし下の心ある
かんし

まふのまかくさるへきうちわしてまかせと
まじうらく寄進しさせまうるかあふべし
よくよくことじりのかきうりなと思ひとどつ
どあへれハ何としらくあるしさ山あしかき
まてかしく世の中ひとめ歩きうゆくと世中
わぐさそのしくやうぬ人まのし叙ど
人あまりてひと川道よらみさもとか
てかりのらく人あまとまるの菩薩すいる二宮御
の御前代猶をそらんじてまさ筑の子ん
のゆりなとも地けしぞうぶとしけらりて
ひとつろうまて人の見とがめへを
まかけ給んそぐてらまこなりゐるおとて見
しろひゐるさらししまりのゆめひとられやう

雲のうちくまもてまろかげよ
びのろゐると 御ゆりしろさ
花紅葉にもんハと御る
まじく地わしまりげくし
されどもくもの名のわまう
おひてかびろうりが袖
表しそうろりて此月のと
まれたる之わの気色ろう海
入日さす 細 係氏もと従五
の勝とるしまあ事し
師も弘徽殿とりて巻の名と
をみ藤雲の女院ともゝ
ドやうこやまろへるしや雲
をゆめどまうやとありつ述
とうろ
人さらぬ 細 な徳よ西白氏
あさけれども人さらぬ所よ
あぞくうひとらきこしく双池
之師 会など愛よてのる
あれば此歌の地りうさ
ともんさりぬるし
入内の変は此母后 細 光帝
の后 弄 藤雲此母の
みゆせ

こよらしてやまふらくのまず心おしくな
あなよ雲のかくもとくれうかゆびきむ
るかともよごとも此光とじまくぬてる
うれしとて袍衣よ地りろう
入日さす暮まくるとひくらせ雲ハ袖
物袖まろやまでへあへらうぬそころ
うれぶくひるし此あくぐあてもそぞそ
ことぐもの川まりて とりし袖くかぞく
岩しらう此への名の此母きうつの此
世もつるそりて此いのりれ師めくさふ
らひろう 僧都故文みもいてゆんへとなりし
さてしき袖ま岩しらりしとぬのやけかも

はいのりの師にて 孟 為雲は母后よりの傳歌の伝授として為雲みもれ信作之
古文なるとは為雲の伝なり之為雲の御母后ハ先帝ノ后之

今は流のをこなひ
今ハとてや涂がるの行
とやめて後世のつとめを
とんとて祇り居るく

いはれある歌し
孟 栗居の傳ハ二聞アり
作者らくの指傳のるす
なり

とのさは世俗しめてこの教へしをとりとこうするものを
なるへし
世俗もてそ世よりしてこそひとつのあさら
勅歌の事とつとりとこうするとぞ
ろうそし七十ぢらつて今ハ流のとこが
傳歌の裏之おくそら
ひとえんとてこのさうかうもやのはとし
ゆるとめとく
よりていでうるとゞらるらおくしおり
おはうくつひよあつく
まそつるよなそくしきを続このにハ紀と
冷泉流よりくり之
細為雲の伝なりなく
のごしくまのさうしくもろくなるうしやを
傳のかた之
どうとよそくめのまへいうはしねるおどなを
傳はなるる之
傳歌伝之
さんがろ世俗し作れど世俗をぞえの
細りものなりし之
しこさよう、おろさはくらごしをそへて
しそそみのよちげしからのりさいれ。

細傳物

こゞいなり
古めしれさなく

いとまへしがらくて
見語ふいハ冷泉流の裏叉
よおそとこつまりて深く
としそしそくきのお敗ひしが
めよゝりて天ゝらりもお
様と歌しるのさしろみて
べさん々くも逝去あらと
傳歌ともろりてこのおりと
冷一ゐしせまりとせさらい
あれらとをり参をとバ久
なそくらせらすもや世俗
されんとたゝふゆべきらし
うらしとく
天眼 花五眼ハ一世、肉眼、天眼、法眼、慧眼、佛眼也 孟 肉眼天眼
慧眼法眼佛眼 五眼之
但もんぞてみしとや
孟 奏しうきこるアあれくも
傳わら教知みがしく打也

へもらくまつてんはおかへまぞてるぞく
しぬる待よこういよしら歌くらなきす
つ、世中のことだなくしよふつるてよ
細 傳歌の何之
いとそうしうしさらえてらくりていつさるゑ
やまらりおてんとにまへくぐうくうこと
細こをよ日でゑるめさのらく
ゆかられどもなろしめもれぬるつをとゆく
天眼イ
て、天のまろすと世俗をろくしやふまぐろるて
ことどうゐつよいきとびゆらく、いのちらを
何の盃のあらんとし
そくり伝ゐれぞおはのやくさは作らん征も
ねぐうこゑしとや兄しめさんとぞぐうりを
え奏しやらぬし
冷泉流
うしさしてえうらいそぬことおりうく
れとろ之
おはぞろすんこの世よりうしそのとる

みだ仏も不真よみだめき
んとく
法師ハ仏の弟子なれども
細一注 寛筆 法華の華
みずくその…し 弁 何
ですとハ定めあてかう
事のふ…
しや。又…れても
あるべし
いらけるりし…
細 もしうらき上の御猶之
文字 細かよ…肉を肉
こうらん…
しまとハ…
この…
ちんとハ…
孟 もとの秘密の…
傍…
られ…
只今 奏もんと…
孟紹…
すゝし…

べくもあへやめん。ゆうしハひゞうと
めゞも。ありましきしと猪のそゑとら
くらうくあ礼なりのとと覚ていい
らけるらしきこそら満てとふくる
きゝ。こゝよいうく世ひのときられうらし
ぎけりとなんつくしとひぬるとの猪とを。
世ハ。あるりこきうるよ仏のいうあまゆる給。
ちんこむのうつきさらをこまうくしとく
むろことすくびろあつうまろう仏り。
ましてくすく海あるこしあまござまあ
仏しん。られいうきさゆくきれのた華
しゆらしんとせられゆらしまし。はし給

うる光は仰のかよハさ
とひ…
法師の…
とも仏の後悔…
弘天の…
細 わぶと…
いあらん…唐言
べし…
なべし…
わくへし 孟 赤旗…
わの是 細 …宝上を
おして…
おられ…
奏…
このあ…
とゞまる…
孙 源氏ハ源君の时のす
へやうの…叔天の
…冷泉の
みかし…
ども…
まづ…又源氏…
少て…源は

きさいのみやうぐいすせとまよくりぐしら給。
ゆゞのはしあそべてなつかしね
こくもやすらいぐ仏しんべきうる光源氏し
の君にハうらひらまへ仏らしとものよの
こひ給へ紅天のつけあまよろこそ
うし給ふらわが云ふしきまれおいしま
しさらしと紀ふ。都家のうくゆかりし
あげくことありてれいのうつくまん
らを給ひてへあん給しくうく法しの心
まえをうり給しれゝしのうらひめあり
て。ゆくしとさ海のつゝまわうらうまひ
しくさいゆくとら覚てめしてりくね

亭子院のみかども御これ
しるし

御くらゐは
冷泉院位をさり給ひて
也。冷泉院位をさり給ふの御
ことなるべし

そのうへに御かうし給ふそ
花山院代の御門をまうしたるの
源氏の御ことをまうしま
ゐらする

伊勢のごみ奏し
御うしろへ(ママ)
逆鱗(げきりん)かうむらんを伊勢恐怖して
御前をまかりさらん
とぞかく

ていのみかどおりゐさせ給ひしとき
ぞとうしめしてなん文そうしよしとく
ちくゐんとられてほかくよつきみたく
しよしまで、つうまつりこそ給
しそのうへに御かうし給ふそでらうし
くそうすることふうしめんすよ わくらし（冷泉院也 獻之也）
うめつくりけりしめてゆそろまうしとれし
うちぶ御ぐまれこうぶれなりと
ぐらの御いつくへとかけまいりし伊勢もそくこゝろ（武蔵もとは云べし）
うしつるど、うんまく申ぞしめそゆやと
まうつしうまりひて、やそうりしこまし（冷泉院也）
しまうるど、めしめてかくまうしく（紙勅定之うく奏しき）

ひとつるうちかしやんのかの世まてのしらかんおう
べうれるしくと、今ゆくくものひこあられ
まりけるをとなんくりてうまうめくうみ
ふかりしとそひぬるえひしとまりてかう
しつるうるひやおとんとのこ御まそ
さうにふかりしと王命婦とかり御の（伊勢日く）
の人とのこよの氣久さうる給ひしてぞかぶよ
まりかんいて御そうしうけ給てん食ん
まうてうよそうしし世中おけりすしぬい
ぴゆのういとさるくすめくふえらうめを（御抗 初め）
まずうつる稚をそ給つれぞやうくはほ
くひさうかおえしまして、うまでととらし

入むこしとまうりて
御心の中に思ふ人やかく
んしく主上の中をれ給ふ
をとれ伊勢く
ぞうようりかん
御心うしの寄るうなりうれ
伊て伝天の照鏡をもそうう
ららうし
あへんまうらうに
細例よそうひうう天象
のう氣よみつくり
菟よへの御よ入清宮よ
ゑまいようすう月日か
しのいこし雲形をとを
きいのうそうもるる
いしとこまうつ
御うまを稚へとも申し（菟 初雅よお）
なうとかり

みやの御世よりも
後る帝からも先王の
例をとりしあらすく
公私ともに歎の行
とて押らし

日ごろ悩ませておもくなりせ給ひ
細 異三万里 草綱子ども
つるゞ
し給ふはりわかくゆかしかるき
御かく

まへさとあべきことあまりてとくとかりし
めとあらじもつけのとしゆやの御世より（久やうの大臣を云）
くらじまうまこそ給ふすれ御のつことゝもし云（孟 先帝の御ことより）
ろしめさぬが此そろしらすまゝしらやつまし
なりてししくとぞするよろこびうりいぞ（外よりことゝらうぢしともひしとく）
し給ぬらこしゝなくくうう御多くかゝるよ
あけさもてあれバまゝでぬらんいゆあれやう（孟 傍 新退之／冷泉院之事之）
よいつかじこことをうつしめてありくに
笑しこうれら給給故隠の御うちなんとう（桐壺の帝之）
しゐめてく此ゞのくゝうゞんへありて世する（今上八子をうり位をゆくんとれつ）
つくゝまつを義よそうけなりう世ら
しゝらうてゆほしるやうをてぬさくなり

御らん人とまうまつるて
孟 御所ゐさこと源の部治
あてゝ末内あらぬと御夜へし
て語文の御ふそかく

その日式アマのみこは
細 桃園のみこ也 権齊院
御以文也 孟 御記に云 延長元
年十一月十六日左大臣奏
式部卿親王薨ス

いづくさをうかゝるねハウくゐんにゆかり給
て此ゞをまじらうそて参りあつかとれ
らんをうよつけくをいふにも志のびがて（冷泉の之）
おぼしめされて御国のうぼれ世給ゆゑ
をみ給る古文の御こしと云うしきくれ（夜つがのゆかを出すりて国のあかりをしやく）
がめしかうしゐすれバまはりとこそ給り（源の之）
すまふその日式アマのみこをおぼひめる
うしそうするよふよしら世中のさはが（冷泉御くそ）
しうとしをあげさまゞしうるうふ
こゝろされバ此ゞい御しみもえまるく（源氏之）
給えてつとさうつしひあへるやらる（冷と源之）
御りの給乃つゞくよ世いつきぬるうや（細 勅定也）

なにはのせかさん
細 たゞめしとハ蕩盡也位
とまりはらんしたるの
位之 盡蕩盡はまし
ませバくそは位よりとま
しまいらく
ひじりのみよ
細 聖代といふ怪異なしとわ
るゝゝ 漢家帝翔不可
勝計也まことに威なり
てりあかく
まくらしふも位れう
細 堯湯負洪水大旱之責
高宗成王有雊雉迅風
之變雉有小異不失天
德後漢皇后記上迅風ハ周
公旦の時の風也雊雉ハ宗庿
のかなえにあがりてなきし
物也しるし

あんりのこゝろがゝく例をしぬくら
のこゝろんもろとおめのさもろの
すゝねよまろ川あはさくしくゑん古
女のせ相さむ所よりてこそ世をおさ
とをひろげるまつれはせはんやをさ
海そもぞく海用しゝゑんとろく
ひゆのしぼいとあるまじ死なくしかりに世
のちぢりすゝぬことにうすんまうぐと
のうそくゆがみみとゝこり位しはさら
しこゝ世にしもわんようくぬくみを位
れうひぢりのこゝうどの世にもましこ海
のらじれゝぞくうしゝゝりわらしゆで位れ

我らがくもさうらん位
細 我朝延喜聖代菅家
左近事以下被
ましてこそ
細 政仕失浩武アマゝ女乃
薨しはしく何をも
皆限りある老はどもし
ところしまいらも
細 かうのうすハ女ならど
のまゝみつきるすまわ
すゝしも世よ陀なれ
いふハもろきさ所よ
一 雨ハ今主上も源も
同しき勝ふかくまう
ませハ位まだ雨なし
と也
みこしをうけまめせて
徳歌めんし事しをあお
して様よをとこうくお
わもるかり

我がくもさうらん位がりしてこしわり
のこゝろひどもの時いそらぬあとせがし
すげくづさこしとかも位しびなしてと
てせかくのこゝでもと世あし給かろ
もめぶもいしこゝりくひやうねから
とらろされこゝそひよや川しまゝる流
こゝらぬゑがふせところすしゝんもうし流
かじかんみもせがしゝらしゝみすれど
めてこゝのわらハみて海をよことそり
すひつゝこゝよいくじあそれなせがり
めぐられハいぞてこのこゝととやまてめごさ
こえぞやとしせがやじゝまずゝはへしさと

くらうしこゆりて
細平生みこと仰ること懇勲
に源によむかひおりしま
こときあやしくゆかりひ
きりえ

今さらに　細落葉をも
くまひきしこしたる
どちうしはさぶくと
同じへきこるものいうじと

かくもゆかりぬべきこともあれバわりなき
けしきにまつはしくかくもえいらい
でさしあらぬ偏どやでゆかりぬこのよ
とじめぞつまりこしるなかんイりう
ざしさを給ひしうりしこゆらあるさ
何めくいでかく気ぬくとかりなど源氏の生
きんのはめみはあやしくことわりに何
へどいどうしさくとこうしめしつくう
んどはおぼえずつきうくん王命婦に
らうしきてとハ偏しう笑しめせど
いまきうふしう思ひ給ふへくしとえり
によりしきの人にかもゆかりれじうじ

かめく　はしの同
細横笛ありしくハ紀さるれ
こうしくせじ源細勝学者
才村スマク　仰茶みもれさ
えの御じ世をとりうこな
給ひんみもとくびりかりう
今じかれバいかくしく
かもうしはい乳りれてとも　河秦始皇ハ荘
襄王の子として位にけ
しうへじも実ハ始皇
の母太后呂不韋と姦
して出生也　見史記　細秦始
皇之事　河海にみえたり
いとくるうりとこうかるいかに
この例あるべし　私ニ案之晋
元帝ハ牛金といふ人の子
也　素鶴林玉露弟又云　呂
帝かふるよ仍て呂秦
とみ晋元帝ハ實ハ父牛金
たの初ハ牛晋ともたるかハ
鶴林玉露によりて秦ハ嬴して

ゆしげにいつぞ偏のめかしうひそうて
まさに　おとなの子みれ位につけるべく
しきうんしぞゆ偏をとしまうしるつかで
ともうけまでいかくれ学問などうるせ
給ひつゞ何ぐまかこしもどいら命ぞう
によりらしかはあくられくしもえの
ひでとこぶうりがハしれことにいとゆ偏ら
そら日本かはさうこよかららんぐさうか
ありしうひありみてそうやう思び
きうんことゞいつそしりつくへしうやうの
わうんしうずう一世の源氏又納言太后にひ
て嬉にさくりよつみてみもたり位つきと

氏なれども実父呂氏なれば呂秦とうたがひ晋ハ司馬氏なれども実父の姓によりて牛晋と
記せり畧記
ひのりくよハ　細 名ちよハかはることなかるべし　花 陽成院の御すゑをひろく　郡用之私にはかハ
似たりと細流　花 陽成院の御母二条后之業平中将との名たかきによりて陽成院の御事を
給はりけるにや　陽成院の帝ハ中将の子としるされしもあるにや
なるべきにやあらし
一世の源氏の例もあまた有り　細 其例河海にみえたり是を源を称しけり
うちうちにて　私 是を天子の位にのぼらんしたるべきかたくなし　河 一世源氏任官已後即
位例　光仁天皇 元大納言　桓武天皇 同親王例　光孝天皇 元一品式部卿宇多天皇
貞観十二賜源氏姓任侍従　式部卿是忠親王 元中内言従三位　元慶八年三賜源姓寛平三年二 九立親王太宰帥是
仁和三為親王即帝位
貞親王 賜源姓任左中将後為親王　中務卿兼明親王 貞元二四為親王 元左大臣正一位源氏
上野太守盛明親王 康保四七五為親王元源氏大蔵卿正四位下

二代の天子御母ハ　細 家のみえてへ
末任ノ給也任桐壺の御子
山女巻にみえたり
始かしよなり　細 源氏ハつ
まろ給ひ人乃ちなりけり

一世の源氏もなくさめのためにいかなる事あらん　[illegible]
（はつきあふてしてなりて）このうしろみにしもてなさ給ひや
みやうこしかしまつれるかずなれぞ宇治まで
なげ秋のつきめしより故大臣にかへ給へ
こしらへくはさきめ給ひつゝそならん
（左京のて）みかしまりしもちらの事とのほし

ゆくじかしよからんはゆく　私 源のうちは位の事なき
まことのうちなくもとにくた
ろあり
あまそのけんあるやうなあり
私 故院の御心さしてあやあら
らんを見れもなかへし
のじうけられりことをうすべひよ
五御譲位のすハ御父故
しかやけよなまいくし
ての海まこうしのまうひを
のうぶ宗居しててとる
ひよこりり給しんとおも
と言くの調よりうつむ
勅答申さるへし

えし給ふりとはしくいとしましゆくゆくとおもてそれ
うち見て さしとよあるまじく許されしあれ
し給ふ故院の御心ざしおぼしいとの
すまいらせけるそのめしなりぬ位を
せ行くしも給ひぬることまふしめしあれこれば
なりようつかりにてそのほかしありてめて
そうならぬこれのかわりかへるとか
のほそそてのかしよせかやけりようつ海
つりてい海をとこしのちとひらそこれり給
まるかいのとろあとかるひねこめる給
つれんとおもひうこれわらしのわらし
くまかうちつ見でさしかもへいいとから

御くらゐそひて
細 従一位の事なるべき歟
牛車ゆるされて
孟 牛車ハ貴敬之御門まで牛をかけて参る輦車ハ宮中へ参る也
輦車を引て後ハ輦車とやしといふ
延喜式云 聽牛車
世 寛弘八年八月左大臣為源朝臣聽牛車出入待賢門上東門云々
みかどあかずかたじけなき物におもひきこえ
孟 源氏を親王になしたてまつらぬ事を天下の政のためには後見の人なしとて
太臣になり給てせちに源氏ハ政をもゆづらせ給ハんといふやうなる事もせんとも
右大将かけ給へるを
源氏の御心のうちの思案也
かゝるついでに。太政大臣になり給
べきさだめあれど。しばしとおぼす所
ありて。たゞ御くらゐそひて。牛車ゆる
されてまいりまかでし給を。みかどあ
かずかたじけなき物におもひきこえ
給ひて。猶みこになり給べきよしを
おぼしのたまはすれど。世中の御うしろ
見つかうまつるべき人なし。権中納言大納言
になりて右大将かけ給へるを。いま一きはあがり
なんに。なにごともゆづりてん。さてのちにとも
かくもしづかなるさまにとぞおぼし
ける。猶おぼしめぐらすに。故宮の御ため
もいとほしく。又うへのかくおぼしなやめる
を見奉り給ふもかたじけなければ。たれ
ならん此事をもらしそうしけんとあやし
くおぼさる。命婦はみくしげどのゝかは
りたる所にうつりて。ざうし
給はりてまいりたり。對面し給ひて
このことをもしものゝついでに露ばかりにて
ももらしそうし給事やありしとあない
し給へど。さらにかけてもきこしめさん
ことをいみじき事におぼしめして
かつは罪うることにやとうへの御ためを
細 薨霊の御心にもあるべからず
かつは罪うることにやと
主上の御ためにもつゝしみ給ふ心なり

るまでひとゝなりけるおほくさ
はかなしとて
一ひとりごちたまふ
細 御前のちかく心深くた
えしなれば　二千里のほか
殿上の遊び恋しく思し給へ
故人の心　細 秋夜中宴
八宴　わが中宴の涙あり
そゞろ一りに涙のうしろを給
ふさぎ涙くせおはしもち
かきれらしひとりて給へ八
入道の宮の雨よみ
えらいかけなくおもひ見せ
たゞおもしくそひ給を
しまさいかにしんとあはれ
なきのしらく殿上近衛の遊
心おらの御べきところ
ともかくとこと
わくまかりしう　細 中宴乃
たるべき人まてもまゐせバ
源も涙ひとつ給く
秋のほど二条院にも　細 今ハ源氏
とほ里のかならず給へたかめ
いふ涙ながらへのせめしとおほかり

ひとゝころにうかくやうかせしけふき給
まじつきをすてしばしもさすふ殿上の女
はいかばかりこひしとおぼすらんかくてやん
ごとなきはかゝりけるはかうしいかはりさ
涙ながらもかりふき涙にほかくもかりしら
ましきを見ゆるばかりげなきものかはりそ
うちながめしうちまつりし秋のころ二千里外
よもすがらもてまゐりらん殿のはちくしひ
とゞまらぬくもらしくうちかひそおなじは
むかしのかやさ涙にかりそめにておなじひ
峯の秋の夜いとながきはかなくてかゞ
への前栽のいろくさかれよかつものおけ

たとへば八人のやうにし侍
しるく
世中のさはがしきにてこそあけ
給しやうそれさうとこそれば
その心にて清雲の雅傳之
上の洞よこれやうなるに
ひきのうそしとありそ
源心さしのふかき涙く
ぜんざいとせしこそ
細 源の洞也百草の花のひ
もとく色々の心あり
河 百草の花のひもとく秋
の野に思ひたはれん人なとがめそ
時とかれかるか
細 源氏の中おろく花ハ
さしもあれど
八秋と心がひもてかけり

さよいかゞ人のことぞうりもさつけおかり
めぐれて汝袖をぬれつゝ女房の
よひよりまつりに海やりするはひるきの
ゆるぐすぐすさまそて世中のさはぐ
きみとこうけつまひてやぞてれさう
なんなれいはぐくなきうてし涙らく
ものすしまへるつきをすする事やうしき
れいそ侯ふてのうちよりあねれん
惟光らを隅て身づから誦じ前栽
どもこそはかなくひもとき給ふそれい
とおきこましきそしけりとんやるて時
よりかなるもおもれまでとそなら

うかよささき さうとく
いかしの流ともくも
細流抄のゆうりせ
くれぞかうや
細 いはしへの芳のまりとい
とぐちつくられは神そ哥
けりわれの 小町姉
孟 設流息ふりとほのれ
のかは付そへ
てんかくぬ上そ 細 中ま
どば源氏未さぐなり
てんかはり給ひなかり
芳八男女の涌わな
様ふしうり
三あしきに 細 源の三よ
し方いるけ 狩り
物語へお業耀時代の
みずふし給ふよりあそも
そいへびなみくしにかり
ら好色の事は抱そひせ
しるそのあらく

よよりゐあへる夕がほへいとめでくらし芳の
流とくもの野の文よ さらまらしひ（桃の巻之）
し明かの事ども きえて いそぎあふにし物哥（源のくく）
と光しうらむを入れ なとしやまとこ（秋実之）
しうき給けるひいとらうさげまそう
らうじうきよ信ともあさましくやさん
らうよる夜めまそ おるすへかからこなまくら（推量之）（源心之）
ぬくそくちおしくれとも思らつづ（流心よられつこ）
あそうそわりや さぞあしきにしくふ（源の詞く）
みすひるやむくさしとりがくて行りよ（まよ語く）
べり世中小とる絵こうろうしにに
ずきさしくるよつけて抱ふひりくえと

まかしきうけとも
源氏の君はしくへよ好色の
のちとはいひようくね
わうまひわらし中に
つみよ後まそんもとは
じやかしるすむら川わ
そうしとて
儀まうしこのと
細 御息所はつねよ源氏う
らにしそ給しくそ
みうすでもつらうまうり
孟 流息所のゆらりされど
中君など大切よおのあく
細 やうのすよきくまり
とまつ人きそし 給べき氣
とし
りえしそうりの 細 いつよい
ひきくもゑへぬことしや
何そおつくれはそて標を
いづもん見しするよけよみ
き給ふと晴 むしてつれぬ
なんとは流息所の思ひのす
文字の抱どうらく
今ひんかくへの給ひさし

さし給ふもうかれさうまじしれこと光のんぶう
しきさぐ おもしろ給しなりきつるまよこころ
そしとけぞ 思ちりしまてやとめらこと
あるわらん給ふすわひとり九 此むさごう給（細流息所之）
あしいへとよ おきましうのこそひつめて
やこ給ふしかあすぐき世のそれがしこちつと
光ひおへられしそうまくもつうま（源の詞）
つりたらんきろくとあすんなぐさわかり
光ふきへ君をとゞめえしなふりのむさそ御
まあのひとんかる紙のふきうここで光のへら（末世の業障をやすめんとなりしるさく）
ろなくいふへいほひとり川そのまひまつつな（細 左近のるく）
くにとのるきよ君づき行し給がこくまで

細とひとつハうきさうしらう面白し。薄雲の御すきまや 河晴 孟 或説ニ秋好ニ
心とけの御ふるまやまことに 師説同
こゝくま思ひまへし お内意あり。ふらハ何ともあなくゆくしくによそとしるうのうこ
つゞくまふとく
りんじの御たり 細 花散
里ノ事説ニよろこびつ給
るかことに御てえしとう。
叢日指也花散里事説ト
猶りわくすハ秋好世のえ
どめまかり
くらうつりぬほけ
が孫宣して天下の政をとる
るまぜくと侍ども。ハ心ならび。
よし故事の方よ心ひろて
すきとのあつく。秋好へちと
源御の御かしく云ふる人と
てののふく
秋 かろけよ 細 わがろけ
あらしつゝくる山の内の事を
源氏の御まえよりかくくわらが
かちけなからうるそへハ
三出ふうこくだらかは
とは若御よつくめりと
しがまめのわきまえり

かたはしづゝかなひにたり。ひ
んがしの院に物する人の。そこはかとなくて
て。心ぐるしうおぼえわたり侍りしも。おだ
しう思ひなりにて侍り。心ばへのにく
からぬなど。我も人も見給へあきらめて。
いとこそさはやかなれ。かくたちかへりおほ
やけの御うしろみつかうまつるよろこびなど
はさしも心にふかくしまず。かやうなるす
きがましき方は。しづめがたうのみ侍る
おぼろけに思ひしのびたる御うしろみとは

時にハひ思ひハよろしとハ源氏
の下に思ひど宣つり
表しよる 細 わがう
あるきこえしや

じせつ思ひ出よこ川へきさ
かの給ひぬこそ
世にてのおもとゝそふる
いまさかの口惜きしく
数ならぬゆかさなき人の
細 明石の姫君也。後ニハ
入内まで也べし。その君の御后
なりべきことく 孟同
師説ハかしぬハ卑下の心也
此門ひろげさせ給ひそ
細 秋好の御幸ニサイにて。此源氏
の一門繁昌ありべきを
心がまへの御約束などの

思ししらせ給ふらんや。哀とだにのたま
はせずは。いかにかひなく侍らんとの給へば
むつかしうて。御いらへもなければ。さりや
あな心うとて。ことごとにいひまぎらはし
給ひつ。いまはいかでのどやかにいの
ちのかぎり。思ふことのこさず。後の世
のつとめも心にまかせてこもり
なんと思ひ侍るを。この世の思ひ出にし
つべきふしの侍らぬこそ。さすがにくち
しう侍りぬべけれ。数ならぬをさなきひ
との侍る。おひさきいとまちどほなりや。
かたじけなくとも。猶この門ひろげさせ

るとき合わ。千公高門の
孫千河海ニ云しくり
于定国父于公高門。東海人。其父于公
国家八曹情家の門乃放
はゝことよ父子ともよつくろひを
こゝは云しかいりく云門とをうく
大の駟馬高蓋入為よ
立て。しづれ獄のりと
してうらまにをとらるゝ陰徳
多くもらゆへに我子孫家
ををことをべしと云々。
くしして宣国太后となり
きょうへ八御史大夫ふとなる
外戚の御史大夫ハ大納言
り也
なりあらくし
辛倍よハ家の門と同門
と生里の門のるゝハ父子
と文君と生里の長さ
ものくしらくこの御室く
しらさるこのるく　孟　家よ
門ひろれてとの給ふ子孫
弄花抄べきなりのハすあらう
たるそうてこの給あれ
へわれらよハ春の花のはや
しを

めひろく。侍らずなりなん後にもかずまへ（源の勘ありてかくいへる）
させ給へなどきこゆ。御いらへはいと（孟　秋好の女御の返事也）（細　御心まさりにすゝしかるべし）
ほのかにかなりさゆまうしてひと
ことうちほのめかし給へるけはひいとらう
げなるに、あはれにて、しめやかにくれてゆく（源の心をき入てこそ）（云めやかなる夕）
つきのちよく女のかくし給ひぬらんのを（源の詞也）
ていしのうちゆきかはる時々の花もみぢ（細　六条院の御方へまいらせんの由心也）
空のけしきにつけても、こゝろのゆくことも（心のなぐさむしるべとなりし）
しはべりにしがな。春の花のはやし、秋の野の盛
のさかりを、とりどりに人あらそひ侍りける
そのころの、げにと心よるばかりあらはなる（細　古来よりさだめなし）
さだめこそはべらざなれ。もろこしには（のかすくく）

春の花のにしきにしくものなしといひ
はべめり。やまとことのはには、秋のあはれを
とりたてゝおもへる。いづれも時々に
つけて見給ふに、目うつりてえこそ花
鳥の色をもねをもわきまへ侍らね（月）
せばきかきねのうちなりとも、そのをり（源の心のうちにはなどのかへなき）
くの心みしるばかり、春の花の木をも
うゑわたし、秋の草をもほりうつ
して、いたづらなる野辺の虫をもすませ（然して秋好みづからの心を見む）
て、人に御らんぜさせんと思ひ給ふるを、いづ
かたにか御心よせ侍るべからんときこえ
給ふに、いときこえにくきことゝおぼせど（秋好のこと　孟　おほやけの御むすめの御心をぞ見む）
いらへきこえさせ給はざらんもうたてあれば

細　河海　石季倫金谷
楽天が句をひかり弄同
輿入晋石季倫居金谷森
花蒲林作五十里錦障
河逢春不遊楽恐是無
心人　楽天河海にもいふなり
辛後わらんらん
やましらの春には
細　河　云楽らは　花のひ
とくに喚つる物の哀く
秋ぞまさる物の心あまで
よそにえるべし　弄同
時々につけて　細門　春秋よ
おもひかれてまさるよつ
時よつけつゝろうん八の
心分るべし
えこそ花鳥の　孟　花鳥
の色ともねともいづれ
よりかまさる分と云を
つかなり
いづれかわうれんにせ給へり
らん　細　六条院四季に住て
くらしてつくるべきんが海
へかりうを木にてそいげ

方よりまよせあへるこれの
とれんくどんへなめ之
三光院殿御説 此段小蝶に春と
秋とを争ふことなり志
ふこ所とらんくうり
ありていふべきなり
細字男のなりさんかびしれ
いふ別わりかさうこと
仲源氏の文よりき給ふね
との事は斎宮のいまして
とく文の流君の人々ずれ
えぶめかさかうかれいま
してまゝよいやとける
中宮は八やましうの紫
上は秋の衣としての君を
をうけくらくまく通
あやしとうし　弁此詞
諸説之いつ連とも答ぐ託
こと云うと母御息所の
よしせての給へる衣よ
西の方へいふそも秋
うらどいわれねども秋
の夕はわやしうかり
しあうりきい給ふし

げにいえそれはつくへまこし給はざらん
をとしてあれは〈秋好の詞〉ましていかでさへことぬ
らんげにいつしかさるまほかや〳〵しと
そうしゆかべくとぞたかうかうえて給ふ
しかのしらすかかも〳〵てまへられめでま
ほとしあじけなりげきのまじらうけ〈源之〉
らうさげなるよえものひ給ふぞ
〈源〉ふることをさは衣どりなどを人々はれども我身
よそむりつ秋のゆふべぞ〈秋好の上の詞〉まことにのひとつさ
くもはりしかともかへ給はいつでのれ
〈の花よりし〉いへかはおとんとらうへがすこしもう
〈源の之細〉かれ風きこえうらこのつりくよえへて

細字には秋の夕にはあやしかりけれ給ふ秋のあはれ
之いへるは頭勝也
秋きこいかさげてはとかりて奇のとりそは秋を衣とさひつまず
人々もかうまうかはれどうはさんとえなさこの人は四の気どいうてかあらうし
さりけの流つきへ　細いかば流つきとし給へきたる給ふると
きこえもんうきさん人は
細字まはへ人がりさ人右
人のうよかをきそうみん
細字をも出し給はしぬと
まさし花源氏君の新釈
人の流きさかりと自称
しのよへ孟日

まこしまのしてもわりべしいまもと
うしひがさしも〈源の之〉き給ひつぐくれたる〈秋好の上の〉いとしうて
とこはいさらもこしえらりよわかれなど
きらくえうかしりしてれぬかりくし
てらかなげきのまつる海のくまれあう
あはあめりしこうも人づきなうにぞ物がたり〈弁花人〉
〈孟云ことつ川のほそく〉ぬらかやりうつひきいり給ふわるこ
〈細源の詞〉まほびあさおしうもうしますを給ふわる
まくしよころわづさへはうくて我とわ

[illegible]

なれ。よしいまよりはにくませ給ふなよ。つら
からんとてわたり給ひぬ。うちしめりたる
御にほひのとまりたるさへ、うとましく
おぼさる。人々御かうしなどまゐりて
この御しとねのうつりか、いひしらぬもの
かな。いかでかくとりあつめ、やなぎの
えだにさかせたる御ありさまならん。ゆゝしう
ときこえあへり。たいにわたり給ひて、とみにも
いり給はず、いたうながめて、はしちかう
ふし給へり。とうろとほくかけて、ちかく人
々さぶらはせ給ひて、物語などせさせ給ふ。
かうあながちなる事にむねふたがるくせの

[illegible]

なほありけるよと、わが身ながらおぼししらる。
これはいとにげなき事なり。おそろしう
つみふかきかたは、おほうまさりけめど、いにし
へのすきは、思ひやりすくなきほどのあ
やまちに、仏神もゆるし給ひけんと
おぼしさますも、なほこのみちは
うしろやすくふかきかたのまさりけるかな
とおぼししられ給ふ。女御は秋のあはれを
しりがほにいらへきこえてけるも、くや
しうはづかしと、御心ひとつに物むつかしう
て、なやましげにさへし給ふを、いと
すくよかにつれなくて、つねよりも

秋好ハ源の子分なれハ恋慕もあるまじけれバ常になどもてなしてよ事にしかれども弄 細孟 此段の例へ可用之 孟 意ハ何れも父のやうなれどもいまはかゝるかたのあらそひにあらでさへ 師 秋好ハ源氏の御心ともをりをりにやつしく覚えしもあれバおのがさへしらずがほなるにさて

徒園よ花や紅葉をもりく御かたちに

これの哀れにあはれ知り

細 紫上のまへとかゝれこゝ

かよふべき心もよりえさ

つま 弄同

花やかなるかし 抄 わぞ

びしういせたまへとのたまふゆ

へよそげなるのいはまなる

うきあるかたの伊原の

なとし 孟 此花を源ハ

身の例をくのみ

しうへ

ゆやがりおはします。女君に。女御の秋に

心をよせ給へりしも哀に。君の春の明ぼのに

心しめ給へるもことわりにこそあれ

時々につけたる木草の花によせても

御心とまるばかりのあそびなどして

してしがな。公私のいとなみしげき身こそ

ふさはしからね。いかで思ふこと

してしがなと。たゞ御ためさう〳〵しく

やとおもふこそ心ぐるしけれ。などかたらひ

きこえ給ふ。山里の人も。いかになど。たえず

紫上ハ源の子分なれハ

紫上とさうさく

紫上のこと

師 不祥

源注

ひとへにあらず

細 明石上之 孟 これよりハ大井のこと

くれなゐあらそひしよりや

細 紫上春より山ごもりを

とゝこもりたまへ

師 源の御心をおぼしてバ紅葉

のまひしらんとなり

ぐはしかれば常にもしる之

あざやかにしもいまはさ給ふ 細

細明石上の事へいたり給

りんとうさきうつくしく

之は梅枝あかきさしつく

源の御りひきかくて 孟 明石

上のうたと源のいたやうな事之

かのおくにうちにそくゆかしそ

うのいまはるい

さうへのからくおぼしめさるゝは

かけてまゐるはせじとわれは

いゆかしけるしもし

いとさらにちかくなれん

細 かくとあれの人とまかて

かまゆとゆかへりて義

ふかくほの御ゆへ

つらうれしなる所かなりの

孟 源のいまはよひまつ

よつるてもつかうるゝ御

契りなし

おぼしやれど。ところせさのみまさる御身にて

わたり給ふこといとかたし。世中

をあぢきなくうしと思ひしる気色

などかさしもおもふべき。心やすくたち

出て。おほぞうのすまひはせじと思へる

をおほけなしとは思すものから。いとほ

しくて。れいの不断の御念

仏にことつけて。わたり給へり。すみ

なるゝまゝに。いと心すごげなる所の

さまに。いとふかゝらぬ人だに。あはれ

ぞそひぬべし。まして見たてまつるにつけても

つらかりける御契りの

はのか

細 明石上のこと

明石へ

大井へ

細 大井の里へ

源の事と兼て

源をうらみし明石の心ばへもさとらし

[illegible]

細 八月のまうれとも

源氏の

日本紀 食

[illegible]

盃のとのゝ筆を善ほはよ古佑る
うしろ打ちまぎれもんとも